令和４年度　学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
1	学びのある学校 ・学習習慣の確立に向けた指導や学力層・個に応じた学習指導により、上級学校進学のための学力を保障をする。 ・授業において、GIGAスクール構想を踏まえたICTの効果的な活用や主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善に努め、思考力・判断力・表現力やコミュニケーション能力の伸長を図る。また、課題を発見し、主体的・協働的に考え、課題を解決することができる探究力を育成する。 ・相互授業参観や研究授業の実施、各種研究会への参加など、研修・研究に積極的に取り組み、教職員の授業力の向上を目指す。	①	予習を中心とする主体的な学びのサイクルを身につけさせるとともに、基礎力の定着及び応用力・活用力等の育成を図る。	教務課 各教科 各学年	予習を重視することにより、主体的に深く考えて学習する習慣が身についていると自己評価する生徒の割合が全体の Ａ　８５％以上である Ｂ　８０％以上である Ｃ　７５％以上である Ｄ　７５％未満である	後期学校評価結果 予習を重視し、主体的に深く考えて学習する姿勢が身についている生徒の割合が ８９％（Ａ）	昨年度(R3)後期と比べて3ポイント増の89%という結果であった。主体的に深く考えて学習する習慣が、着実に定着していると考えられる。 また、これまでの教員の努力による要素も大きいと考えられる。
		②	３学年にわたる学習体系を確立させ、課題研究を充実させるとともに、その取組を通じて生徒の探究力の伸長を図る。	ＳＳＨ 各教科 各学年 教務課	すべての授業において、探究力が身についたと答える生徒の割合が Ａ　８０％以上である Ｂ　７０％以上である Ｃ　６０％以上である Ｄ　６０％未満である	前期学校評価結果 すべての授業において、探究力が身についたと答える生徒の割合が ８９％　（Ａ）	定期考査における探究力の伸長度を測定する問題を各教員において作成したが、その評価が十分に信頼できるものか否かを検証しなければならない。
		③	生徒の具体的活動を評価するパフォーマンス評価をさらに充実させ、学校設定科目や課題研究における探究活動でルーブリックを作成し、それを用いた評価を行う。今年度は、生徒自身が作成したルーブリックを各発表会ごとに使用し、自己評価能力を育成する。	ＳＳＨ 進路指導課 各教科 各学年	「課題研究発表会」において、使用されたルーブリックが自身のフィードバックに有効に活用されたと考える生徒の割合が Ａ　９５％以上である Ｂ　９０％以上である Ｃ　８０％以上である Ｄ　８０％未満である	年度末の生徒評価 ルーブリックが自身のフィードバックに有効に活用されたと考える生徒の割合が １００％　（Ａ）	ルーブリックで課題研究を評価することが浸透してきたことから、生徒自身がルーブリックを作成することで、現在の状況や今後の目標を明確にすることができた。
		④	課題研究を通じて、生徒に主体的・協働的に課題を解決することができる探究力をつけさせる。	ＳＳＨ 進路指導課 各教科 各学年	２年生、３年生の文系において、課題研究を通して探究力がついたと考える生徒が Ａ　８０％以上である Ｂ　７０％以上である Ｃ　６０％以上である Ｄ　６０％未満である	年度末の生徒評価 ８９％　（Ａ）	第２学年の「人文科学課題研究Ｉ」及び「課題探究（文系）」において、探究活動に十分な時間を確保し、探究力を育成することができた。今後は教員間での指導法の共有を活発にし、課題研究のさらなる充実をはからなければならない。
		⑤	研究授業等を通して、教員自らが教科指導力を高め、授業の質的向上を図る。	教務課 各教科	アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたり、ＩＣＴ機器の活用を工夫することで、自らの授業を改善することができたと自己評価する教員の割合が Ａ　７５％以上である Ｂ　６５％以上である Ｃ　５５％以上である Ｄ　５５％未満である	後期学校評価結果 私はICTの活用を工夫することで授業改善につなげた ８３％　（Ａ） 私はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れている ７８％　（Ａ）	R2年度から新規項目として行っている調査であるが、ICT利用に関しては83%の教員が授業改善につなげていると回答しており、昨年度(R3)と比較して5ポイントの増加が見られた。ICT利用が着実に定着していると考えられる。 一方、アクティブラーニングに関しては昨年度(R3)より12ポイント増加して78%の教員が取り入れていると回答している。かなり改善が見られているが、一人一台端末等のICT機器を活用してのアクティブラーニングまで応用できているかについてはまだこれからである。

学校関係者評価委員会の評価	ＳＳＨ、ＮＳＨ事業がコロナで滞っているものがまだあるが、これまでの取組を是非次年度再開、継続できるよう期待する。
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策	コロナ収束を機会にＳＳＨ・ＮＳＨ事業をコロナ以前の状況に戻し、今後とも高い学力と豊かな人間性を身につけ、国際社会に適用する人材の育成に努めていきたい。

令和４年度　学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
２	個性が輝く学校 ・学習指導と進路指導の連携が取れ、３年間を見通した指導体制のもと、生徒に高い志を持たせ、一人一人の進路実現を図る。その際、低学年からのキャリア教育を充実させ、学ぶ意欲や進路意識の高揚を図る。 ・「文武両道」「自主自律」の精神のもと、学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動の充実を図り、レジリエンスの涵養と豊かな人間性と社会性を育む。	①	低学年より意欲的・主体的に取り組む姿勢を養い、個々に応じた高い進路目標を設定させる。「小松進路メソッド」の活用及び、面談を充実させることにより、高い進路志望を維持させる。その志望を持続させ、第１志望を貫く精神と意識の涵養を図り、進路目標の実現に向けて、学年会・教務課・進路指導課・ＳＳＨ推進室が連携した効果的な指導により学力を養成する。	進路指導課 教務課 各学年 ＳＳＨ	難関１０大学と国公立大学医学科の志望者数の合計が Ａ　１８０人以上である Ｂ　１５０人以上である Ｃ　１２０人以上である Ｄ　１２０人未満である	９月３年進路志望調査結果 １６２名（Ｂ）	難関１０大学志望者が１５０名、医学部医学科志望者が１２名であった。難関１０大学志望者が４月に比べ若干減少したが、引き続き志望を下げないように指導したい。
					難関１０大学と国公立大学医学科の合格者数の合計（現役生と過年度生の合計）が Ａ　７５人以上である Ｂ　６５人以上である Ｃ　５５人以上である Ｄ　５５人未満である	難関１０大学合格者が５６名（現役４４名）国公立大学医学部医学科合格者が６名（現役４名） ６２名（Ｃ）	最難関合格者が東京５名、京都４名、東工４名、一橋２名の合計１５名と過去２０年間では平成２５年の１６名に次ぐ２番目の結果であった。難関１０大学の合格者数も例年並みとなり、まずまずの結果であった。
		②	端正で品位ある服装容儀や挨拶の大切さを理解し、規律ある学校生活を送ることができるよう指導する。	生徒指導課	生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が Ａ　９５％以上である Ｂ　９０％以上である Ｃ　８０％以上である Ｄ　８０％未満である	後期学校評価結果 生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が ９３％　（Ｂ）	前期と同様な数値であった。。昨年度（R3）前期は94%、後期は91%だったので、ほぼ昨年並みと考えられる。落ち着いた学習環境の維持のために、挨拶・時間・身だしなみ・規範意識など学校生活の中での自分の振る舞いを振り返らせ維持向上させていく指導に努めていきたい。
		③	いじめが起きにくい、いじめを許さない環境を維持するため、すべての生徒が安心でき、充実感をもって「みんなで何かをするのは楽しい」と考えながら学校生活を送るために、教育相談室等と連携を図る。	生徒指導課 教育相談室 各学年	みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が Ａ　９５％以上である Ｂ　９０％以上である Ｃ　８０％以上である Ｄ　８０％未満である	後期学校評価結果 みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が ９６％（Ａ）	９６％であった。昨年度（R3）前期、後期とも97%でほぼ昨年並みと考えられる。肯定的にとらえる生徒の割合が高水準である。長期休業明けは環境の変化が起こりやすいので、注意深く観察し、いじめの兆候を見逃さず、関係機関と連携して組織的な対応を心掛けていきたい。
		④	挨拶運動や部活動運営委員会、部顧問会議等を通じて、生徒の部活動における活動規則の遵守や挨拶の励行、部室清掃の徹底を図る。また、自己肯定感を向上させる取組や、学年に応じた指導を、教職員全体で行う。	生徒会課 部同好会顧問	部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が Ａ　６０％以上である Ｂ　５０％以上である Ｃ　４０％以上である Ｄ　４０％未満である	後期学校評価結果 部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が ５５％（Ｂ）	55%で昨年より５％増加している。職員のアンケートからも好感触が数%の上昇。部活動を頑張っている生徒が多く、成功体験だけではなく、小さな失敗を経験し、どうやって立ち直って行くかを考えさせたい。様々な活動を通じて自己肯定感、自己有用感が向上していくよう指導したい。
		⑤	日々の清掃に加え、各学期ごとに大掃除や環境美化週間を設けて、校内美化を促進する。また、教室、廊下のゴミ箱を撤去し、ゴミの持ち帰りを推進し、節電、節水も、環境美化ポイントの指標に入れる。	保健環境課	環境美化意識を持って行動している生徒の割合が、 Ａ　９５％以上である Ｂ　９０％以上である Ｃ　８５％以上である Ｄ　８５％未満である	前期学校評価結果 環境美化意識を持って行動している生徒の割合が ９３％（Ｂ）	中間評価と同様の93％であった。2学期の環境美化週間の結果は1学期に比べ合格クラスが62.5％(15クラス)から95.8％(23クラス)と大幅に向上した。生徒の環境美化意識は高く、今後も引き続き継続できる様にしたい。生徒間で自分たちの生活空間の環境美化について考えさせ、より多くの生徒が行動できるように図りたい。

令和４年度　学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
2		⑥	教科・学年および図書委員会と連携し、生徒の図書室利用を促進するとともに読書活動を推進する。また、読書への関心を高め、知的好奇心の喚起に努めることで、不読率を低下させる。	図書室 各教科 各学年	年２回（春・秋）不読率の平均が A　30%以下である B　40%以下である C　50%以下である D　50%以上である	アンケート結果（４回実施） ６２％（D）	不読率は62%と、昨年度比11%増加した。アンケート実施機会を増やした結果、受験勉強の本格化に伴い数値が悪化したことも一因と考えらえる。しかし、読書をしなかったと答えた生徒のうち約３割が「忙しくて読む時間がない」と答えている一方、残り７割が「読む気がしない」と答えるなど、読書離れが加速している感は否めない。このような傾向に歯止めをかけるべく、今後さらに様々な機会に情報を発信し、生徒の読書意欲を喚起できるよう改善を図りたい。
		⑦	体育の授業を通じて、体力向上の大切さを理解させ、筋力・走力と、体力の源である持久力アップのための取組を行う。	保健体育科 各学年	走力（持久力）の記録が、春より秋に向上した生徒の割合が A　８０％以上である B　７０％以上である C　６０％以上である D　６０％未満である	持久走の記録を春と秋で比較し、向上した生徒の割合が ６８％（C）	全体では、６８％の生徒の記録が向上した。 例年、３年生は部活動を終了するため数値が低くなる。今年も３年生のみの結果では、５６％の向上にとどまった。これは例年と同等である。 学年で見ると１年生は、６４％の向上となった。例年８０％を超える年もあるが、今年度は１年生の伸びが低かったといえる。 持久力への各生徒の取り組みが本校の強みであると考えている。そのため、来年度に向けては、新２年生への取り組みのしかけ・工夫と新入生への動機づけが課題となる。
学校関係者評価委員会の評価				平日・土曜補習を実施していることに対し、保護者は一定の評価をしているが生徒や教職員の充実感アップのため方策を考えてほしい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策				平日補習では生徒の希望を反映、土曜補習は回数や内容について、生徒が自由にできる時間も考慮しつつ行っていく。			

3	地域から信頼される学校 ・学校公開やホームページ等を通じて本校の教育活動を積極的に情報発信し、保護者や地域から信頼される「開かれた学校づくり」を推進する。 ・地域でのボランティア活動を推進するとともに、異校種間の連携を密にし、南加賀地区の基幹校としての自覚ある学校運営に努める。	①	主な学校行事や特色ある教育活動等について、生徒・保護者・地域から求められる情報を、ホームページやPTA活動等を通じて発信する。	総務課 教務課	学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が A　９５％以上である B　９０％以上である C　８５％以上である D　８５％未満である	後期学校評価結果 学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が ９４％　（B）	９４％で、昨年度比プラス７％。 ほぼ一昨年並みで昨年度からはプラスになった。コロナ禍でまだまだＰＴＡ活動に制限がかかっているが、そのなかで工夫をして活動を考え、実行している。 またメール配信については、今年度よりＰＤＦファイルを添付し、情報を保護者が直接見ることができるようにした。特に各学年が情報をこまめにメール配信・ホームページにアップしており、高評価につながったと考える。 次年度は、学年で保護者のメール配信登録が、早い段階で１００％になるように、段取りしていきたい。
		②	部・同好会活動が、各々の特性や得意な分野を活かすなど、地域等のボランティア活動に年間最低１回は参加する。	生徒会課 部同好会顧問	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の数が全体の A　９０％以上である B　８０％以上である C　７０％以上である D　７０％未満である	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の割合 ９４％（A）	全ての部・同好会が11月から1月を中心に、校地内外でさまざまなボランティア活動を実施した。ボランティアという企画がなくても、身近なところに気を配り、日常的に活動していくよう働きかけたい。次年度は、外部からの案内を周知し、個人の活動としてボランティアへの参加などを促したい。
学校関係者評価委員会の評価				生徒や保護者のなかには、ＳＳＨ事業やＮＳＨ事業について理解していない方が多い。広報活動を工夫する必要がある。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策				全校生徒・保護者に理解してもらえるよう、ホームページへの掲載、校内の共用スペースの利用等広報活動に取り組んでいきたい。			

令和４年度　学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
４	「働き方改革」に沿った職場づくり ・各自がワーク・ライフ・バランスやタイムマネジメントを意識して業務や部活動の効率化を進め、時間外勤務時間の縮減に努める。	①	教育的効果を考慮しつつ、行事・業務の整理を行うとともに、業務の平準化を進める。	副校長	行事･業務の整理･統合･精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が Ａ　７０％以上である Ｂ　６０％以上である Ｃ　５０％以上である Ｄ　５０％未満である	後期学校評価結果 行事･業務の整理･統合･精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が ５４％（Ｃ）	昨年68％で評価Aであったため目標数値を10%上げたのと昨年より14%、前期より4%下がり評価はCとなった。一因として1年生の評価時に観点別が導入されたことも考えられるが、ICTだけでなく採点業務省力化ソフトの導入も行っているので更なる効率化が行えるよう啓発していきたい。
		②	月２回の定時退校日、部活動の休養日等を設定し、さらに業務遂行の効率化を進める。	教頭	時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が Ａ　　５％未満である Ｂ　１０％未満である Ｃ　１５％未満である Ｄ　１５％以上である	教職員勤務時間調査結果 時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が ９　％（Ｂ）	昨年度は一昨年度より部活動による休日の勤務時間が増え、80時間を超える教職員の割合が、13%程度であった。今年度は、80時間を超える教職員の割が、9%程度となり、昨年度よりも３分の１程度減少し、時間外勤務時間の縮減は進んでいると言える。今後も、特定の教員に過重な業務負担がかからないように、校務のさらなる効率化、平準化を図りたい。
学校関係者評価委員会の評価				コロナ以前より多忙感が増したのではないか。引き続き業務の効率化に努めてもらいたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策				ＩＣＴ支援員に配置され機器のメンテナンス作業等を担ってもらっている。また、採点支援ソフトの導入も含め、教育的効果を大切にしながら業務の効率化に努めていきたい。			